

横芝の碑

(その四十五)

子供達の天神様

鎮守様等の山道の端や森陰には鎮守様とは全く別の神様をお祭りした木や石の祠が建っています。中には、次第に参詣する人が無くなり、何時か草群に没してしまふものも見受けられます。そうした祠の一つに天神様があります。

天神様は、天の神、あまつがみを称する意味もありますが、一般には菅原道真公をお祭りしてある天満宮の名称として知られています。

菅原道真は、宇多天皇(八八七―八九七)の信任を受け、右大臣にまで昇任しましたが、藤原時平等の讒言(ざんげん)によって、九州の大宰府に流配され(醍醐天皇の延喜元年〓九〇一)、その三年に配所で故くなりました。詩文と書に勝れ、書では、小野道風、僧空海と共に筆の三聖と称えられております。また、東風吹かば、香いおこせよ、の和歌や、去年の今夜清涼待すから始まる九月十三夜の漢詩は、よく人々に知られています。死後、時平等の讒言であることが分った村上天皇の天曆年間(九四七―九五七)に、流配を許され、京都の北野に天満天神

として祭られました。この経緯については、将門・純友の乱にまつわる、道真の怨霊鎮撫説も伝えられており、昔から、菅公、菅丞相等と称され、特に延享三年(一七四六)に浄瑠璃 菅原伝授手習鑑(じょうるり、すがはらでんじゆ

てならいかみ)が、武田出雲等の合作として公演された影響等もあったのでしうか、学問の神様、子供を護る神様としての印象が人々の心に浸透してきました。そして、天満宮以外の鎮守様の境内には、何処かに、きつと天神様の祠が建って、子供達の神様となっていました。子供達は、道真公の命日といわれる二十五日には、それぞれ、米や味噌、醤油、その他炭や薪、幾らかの調味料代等を持ち寄って、混ぜ飯、握り飯等を自分

達の手で作り、まず、打揃って天神様にお供えした後で会食を行ない、来月の打合せや自分達の行事の話合い等また、石蹴り其他の遊戯を楽しみ、時には、習字の作品展等も行なっていたのです。謂はば自主的な子供会の草分け、という訳だったと思います。この行事を何時か、天神講と呼んでいました。命日に行なうということについては、日曜日を利用するようになったこと等から次第に別の日に変わってはいりましたが、行事そのものは終戦後も続いていたようです。しかし、食糧事情の困難其他で、誰もが同じ条件で集ることが出来なくなり、また、大人が面倒を見てくれる子供会の誕生や、信仰的な面が薄くなって来たりして、天神講の話も出なくなり、天神様の

祠も草群に隠れてしまふのか、と思われましたが、最近になり、ちらほらと、その祠の手入れが始まり中にはコンクリート等で社殿風の祠を献納した所もあります。やはり昔を忍ぶ心の集りでしょうか、孫を抱き、子供と連れ立って鎮守様に参詣の折、ふと立ち止った天神様の祠の前で、遠い子供時代の天神講の想い出にふけるのも、また、たのしいものだと思います。○写真は、栗山の鎮守様鹿島神社の参道の畔に建っている天神様の祠です。後に隠れる様に見えるのが昔からの、謂所天神講時代のもので、前方社殿風のは最近の建立で正面下床には天満宮と刻んであります。(本稿取材に当り、栗一加瀬実氏の御指導を得ました。)

(町文化財審議会委員小沢春光氏寄稿)



天神様の祠(上)と案内図(下)

